

私は、街の中心部に住む一町民として「河合谷小学校廃校」について反対の意見を述べさせていただきます。

高校1年の時、一人の河合谷中学校の卒業生が同じクラスになりました。

同じ津幡町でも、私にとって河合谷という所は特に訪れる用も無く、禁酒で小学校を建てた村だという、地名だけ知っている程度でした。

最初に河合谷を尋ねたのは今から20数年前、バイクで小矢部市嘉例谷から三国山山頂にある神社へ登り、帰りにまだ廃屋が数件あった尾山の集落へ下り、御山神社とブナの木を見に行った時でした。森林公園三国園地もまだ出来ていない頃で、大変な山道だったのを記憶しています。文字通り山紫水明の美しいたたずまいの村でした。

昨年の十月、津波多百韻会と町教育委員会の主催で開かれた「第15回生活文化展」の特別展示で河合谷の産んだ仏教哲学者「谷内正順師」を取り上げ、師の業績を広く皆様に知っていただく機会を持ちました。

師のご家族のご協力で、東京第一高等学校時代の学帽、明治44年に東京帝国大学文科大学哲学科を首席で卒業された際、明治天皇から御賜された銀時計や、卒業論文、書画、著書等が展示され、生活文化展来場者は「この町に、こんなに素晴らしい哲学者がいらっしやったのか。知らなかった」と感嘆の声を上げました。

奇しくも河合谷は室町時代、曹洞宗総持寺、永光寺に隆盛をもたらした「蛾山道」でも知られる偉大な禅僧「蛾山韶碩」も生んでいます。

時代は違うとは言え、日本有数の仏教哲学者2人を輩出した特異な村です。

今問題になっている小学校は、大正15年7月、老朽化した校舎の改築が完成。その費用4万5千円余を捻出するため、村民が向こう5年間禁酒することにより、酒代を貯金し完済。禁酒は5ヵ年毎、4回更新され20年間続きました。このことは昭和49年3月刊行の「津幡町史」の842ページより868ページの27ページにわたり詳しく記述されています。このような小学校を持つことはわが津幡町の誇りであります。

「昭和の大合併」の際、河合谷村は押水・高松との合併より津幡町との合併を選び、昭和29年5月16日編入合併いたしました。

戦後十年前後の、どの自治体も財政状況の苦しい中、河合谷村は編入合併の際、林野等の村有基本財産を所有し、津幡町に引き継がず、現在も「津幡町河合谷財産区特別会計」として管理しています。下世話な言い方をすれば、津幡町へ嫁入りする際、河合谷村だけが土蔵と持参金を持ってきたと言うことです。

明治以来、村民が協調の精神で築き上げた財産は、有効に活かされ、昭和45年、今、廃校反対が問題になっている「旧河合谷小中学校校舎」の新築工事の際、河合谷財産区特別会計から繰入金1200万円。翌46年度は河合谷小学校校舎売却収入として20万7000円・河合谷財産区からの繰入金110万円が建設費用に使われています。

この金額は、河合谷小中学校の建設費用総額1億3千961万5千596円のほぼ1割を占めています。

刈安小学校、萩野台小学校・太白台小学校・笠野台小学校などの新しい校区が定められた小学校、条南小学校などの人口増加による新設小学校など町内には多くの小学校が建てられましたが、小学校建設に際し、それらの地元からこれほど多額の出費があったとは、私は寡聞にして知りません。

子どもたちの一生を決める初等教育の重要性を深く理解されている河合谷住民だからこそ、大正時代に世界に他の例を見ない禁酒で小学校を建て、昭和には小中学校舎建設に多額の繰入金を提供しました。

地域ぐるみで行う学校行事、他の校区から河合谷小学校へ通っている児童に対する住民の接し方など、河合谷小学校を愛する地元の皆様の熱い思いを考え、「廃校」の2字を見ると胸が張り裂けそうな気が致します。重要な初等教育の場であり、地域住民の心のよりどころである小学校が無くなることは、河合谷の住民のコア・核が無くなることです。

廃校になれば過疎に拍車がかかり、コミュニティの崩壊が待っていることは容易に想像できます。

先日、かほく市の友人と話す機会があり、そのことが話題になりました。かほく市には河合谷小学校のように、自然豊かな環境で子供を育てたいと考える父兄や、団体生活になじまない児童を、中学進学までに少人数でのびのび教育して欲しいと思う父兄に答えられる小学校が無い。津幡町で受け入れてくれることが可能ならばと言われました。近くの自治体からの児童の受け入れや、長野県などでも行っている山村留学制度の導入など、ここまでになる前に教育委員会は特認校維持の努力をされたのでしょうか。

私が本年3月議会で質問し答弁を頂いたとおり、小学校運営のための財政は何の問題もなく、ただ耐震の基準に適合していない建物で、改築に多額の費用を要するというだけで、住民の同意もなく廃校が決められてしまいました。

議会最終日前日と当日の朝、当時の河合谷振興会会長、河合谷区長会会長のお二人が、「町立学校条例一部改正」に賛成するであろう議員の皆さんの自宅を訪ねて、ほとんどの議員さんが理解され、いい感触を受け、議会最終日を迎えました。しかし、結果は賛成多数。あとで複数の賛成議員から「本心は河合谷小学校廃校には反対だが、賛成に回るようにシバリがかかった。」との言質を得たそうです。同じように、私自身も複数の議員からそのことを聞いています。

今年度の議会全員協議会で、前監査委員であった議員から「河合谷小学校維持に金がかかりすぎるから、監査委員2名から廃校を3回、町当局に通告した。」との発言があったと聞きました。

3月議会での答弁では、河合谷小学校の維持費はほとんど交付税で充足され、不足分・町からの出費は約70万円くらいだったと記憶しています。監査委員会は、このことをもちろん把握していたんでしょうね。

26日読まれた町長の意見書にあった河合谷に関する各事業の金額は、総事業費であり、すべて町税からの出費ではありません。中山間地域緊急ほ場整備事業・上下水道施設整備事業・消

防設備で耐震性防火用水槽を作り消防ポンプ車を購入する、こんなことは河合谷だけがやっている事業でしょうか。

また、町内の、他の地域の事業費を示しての比較もせず、あたかも河合谷がこの津幡町の「金食い虫」であるかのように印象づけるあの文章は、私に言わせれば悪意に満ちた数字と言葉の羅列であります。

また、人間形成に一番重要な初等教育に「費用対効果」と言う経済用語は決して馴染みません。

禁酒で学校を建てた当時の村長の名は ^{もりやまちゆうしょう} 森山忠省さん。河合谷にあまり関係の無い私でもその名は存じております。まして河合谷の人達に彼の名は、未だに語り継がれております。

もし、河合谷小学校廃校が現実のものとなった時、現町長、現教育長の名は河合谷の人々のみならず、短期間にもかかわらず、廃校反対署名に協力して下さいました多くの町民の記憶に長く、残ることでしょう。

賢明なる議員諸氏にお願いいたします。

先ほど述べましたとおり、河合谷の人々は学校維持のために、これまで涙ぐましい努力を払ってこられたのです。河合谷の皆様や多くの町民が望む小学校存続に、どうぞお力を下さるようお願いいたします。

民主主義とは、多数決によってでた結論が正当だという意味のことを、この議会でどなたかが言っていました。それは誤りです。真の民主主義とは「最終的には多数決によるとしても、その意思決定の前提として、多様な意見を持つもの同士の、互譲をも含む理性的対話が存在することをもって正当とする」ということであります。つまり、民主主義とは、多数決と少数意見の尊重なのです。こと、ここに至る迄、互譲の精神、理性的対話があったのでしょうか。

先の二十世紀から今世紀にかけて、多数意見をもとに起こされた数々の戦争、今、冷静に考えると正しかったのでしょうか。近くはベトナム戦争、イラク出兵等々。多数決とはそんなものです。

10月17日朝日新聞大阪本社発行の全国版夕刊に「廃校、ちょっと待った」と言う見出しで河合谷小学校廃校の4段記事が掲載され、翌18日の石川県で配られる朝日新聞朝刊にも3段で掲載されています。

また、10月27日の朝日新聞朝刊石川版にも住民の直接請求と、常任委員会傍聴の許可申し入れの記事が7段カラー写真入りで大きく掲載されています。

本日の臨時議会における議決結果は、明日の朝日新聞の全国版に掲載されることでしょう。本日の議会決議はこの町ばかりでなく、全国の注目を集めています。

議員の皆さん、御自分の意思で、お考えで、勇気を持って意思を表明してください。